

論文

地域における子育て支援活動の取り組み － “保護者支援” としての役割・機能に関する一考察－

松本麻希・西村侑香里・田中麻里

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(平成30年11月22日受理)

Efforts in Childcare Support Activities in Communities －A Study on their Role and Function as “Support for Parents”－

Maki MATSUMOTO, Yukari NISHIMURA, Mari TANAKA

(*Department of Children's Studies, Faculty of Children's, Nishikyushu University*)

(Accepted November 22, 2018)

Abstract

The childcare support activity “Children's Museum” aims to support childcare and child growth in communities and has been continuously conducting activities since 2009.

In this study, we attempt to analyze and study parents who participated in the activities from the viewpoint of “support for parents” based on descriptive content from a survey on the kinds of experiences these activities led to.

The results suggest that participation in the activities leads to experiences such as “awareness/discovery of childcare/child growth,” “growth of relationships and play,” “refreshing for parents themselves,” and it seems these activities fulfill the role/function of “support for parents.”

Key words : community 地域

childcare support activities 子育て支援

support of parents 保護者支援

content analysis 内容分析

KJ method KJ 法

1. はじめに

地域子育て支援活動「子どもミュージアム」は、西九州大学子ども学部子ども学科が新設された平成21年度より継続的に開催している“地域子育て支援活動”である。

本活動は平成30年5月で、初回開催から丸9年を迎え、一つの大きな節目を迎えようとしている。平成29年度には、年間12回の開催をおこない、延べ131家族261名（大人100名、子ども161名）の方々が本活動に参加し、近年では口コミによる新規参加者の増加や、保護者同士の誘い合わせによるリピーターの数も多くみられるようになってきた¹⁾。

また、近年の取り組みの特徴としては、“地域に開かれた子育て支援”が挙げられ、本学キャンパス内だけでの開催に留まらず、地域の青少年育成事業団体と連携・協同して活動を企画したり、大学近隣の小学校や本学のサテライト教室^{注1)}に学生たちが直接出向き、アウトリーチ型の講座をおこなうなど、地域の子どもたちや子育てをしている親世代にとって、より身近でアクセスしやすい“場”となっている。

本活動の企画・運営は、保育・幼稚園・小学校等の領域で、子どもと関わる専門職を目指す学生たち〔「子ども学演習」の受講生／子ども学科3年生〕が主におこなっている。活動運営の特性上、本活動に関連した研究・実践報告については、実際に参加した学生の“実践的学びのあり方”や、“子育て支援活動を通した学生の成長過程”等、学生視点に立った学びの検証が、これまでおこなわれてきた^{2,3,4)}。

しかし、本活動に実際に参加した方々が、活動を通してどのような所感を抱き、且つ、子育て支援活動に参加することが、自分自身にとってどのような

体験へと繋がっているのか、参加者の視点に立った検証は、十分におこなわれていないのが現状である。

そこで、本研究においては、参加者の中でも特に“保護者”の視点に着目し、子育て支援活動に参加する中で抱く所感や体験のあり方を検証するとともに、“保護者支援”としての本活動の役割や意義について論考していきたい。

2. 活動の概要

1) 活動目的

子どもミュージアムは、子どもとその親の子育て・子育てを支援することを目的とした子育て支援活動であり、体あそび、歌、絵本、科学、製作等、子どもの発達に応じた様々な遊びや交流の場を提供している。

2) 参加対象者

主に就学前の子どもとその保護者、そして小学生を参加の対象としている。

3) 開催日時

平日（木曜日）開催と、土曜日開催の2パターンを設けている。活動の時間帯は、平日・土曜日開催ともに午前中となっている。なお、平日開催時は、活動終了後～14時までの間、使用施設を自由開放している（Table. 1）。

4) 活動場所

主な活動拠点は、西九州大学（佐賀キャンパス内）であり、「子育て支援室」「保育演習室」「表現スタジオ」の3室を使用して、活動を開催している（Figure. 1～3）。

Table. 1 活動スケジュール

木曜日開催	土曜日開催	活動スケジュール	学生の動き
10:15～	9:30～	受付開始	環境設定・会場設営 受付・駐車場誘導
11:00～12:00	10:30～11:45	ミュージアム開催	活動プログラムの実施
12:00～14:00	—	施設自由開放（木曜日のみ）	片づけ・掃除 振り返り

（自由開放は平成29年度まで実施）

¹⁾ 「小城市まちなか市民交流プラザゆめぷらっと小城」大学サテライト教室では、西九州大学が所有する教育、研究、地域連携資源を活用し、地域住民に対して「学びの場」、「地域づくりの場」、「健康維持の場」を提供していた〔尚、大学サテライト教室は平成29年度3月迄の開設である〕。



Figure. 1 子育て支援室



Figure. 2 保育演習室



Figure. 3 表現スタジオ

3. 研究の目的

本研究では、子育て支援活動『子どもミュージアム』に参加することが保護者らにとって、どのような経験として繋がっているのか“保護者支援”という視点から分析・検討することを目的とする。

検証をおこなう際は、「①（保護者からみて）子どもにとって、どのような体験として繋がったと思うか」、そして「②親自身にとって、子育て支援活動

に参加することが、どのような体験として繋がったのか」、この2軸に着目し、保護者アンケートの内容分析をおこなうこととする。

さらに、本検証の結果を踏まえた上で、“保護者支援”としての本活動の役割や意義について考察していく。

4. 方 法

1) 調査対象

平成29年度に開催した子育て支援活動「子どもミュージアム」に参加した保護者100名

2) 調査期間

平成29年5月～平成30年1月

3) 調査方法および調査内容

各回の子どもミュージアム終了後に、保護者アンケートを配布し、活動参加を通じた感想や満足度、さらには今後の活動へのニーズ・要望について、回答を求めた（回収率88%）。

なお、今回実施したアンケートの項目は、下記の通りである（Table. 2）。

Table. 2 保護者アンケートの項目内容

項 目	内 容
項目1：性 別	
項目2：年 齢	
項目3：勤務状況	
項目4：活動参加の頻度	
項目5：活動を知ったきっかけ	
項目6：活動参加の動機	
項目7：活動参加の満足度	
項目8：子どもにとってどのような体験になったと思うか	〔自由記述〕
項目9：保護者自身にとってどのような体験になったか	〔自由記述〕
項目10：今後の参加について	
項目11：活動に対する要望・希望	〔自由記述〕

4) 分析項目

本研究では、実施したアンケート項目の中でも、「項目8」「項目9」の2つに着目し、“（親からみた）子どもにとっての体験のあり方”そして“親自身の体験のあり方”について、質的な視点から検証をおこなう。

5) 分析方法

保護者アンケートから得られた自由記述を、KJ法に準ずる形で、先述した2軸に沿って分類・カテゴリー化していく。

集約された内容については、最終的に図解化し、

記述内容を整理していく (Table. 3)。

なお、内容分析をおこなうにあたっては、より多角的な視点から検討できるよう、本活動のマネジメント・運営全般に携わる筆者ら複数で実施した。

Table. 3 分析手続き

Step 1 : ラベルづくり (記述内容を切片化する)
自由記述で得られたものを、1つの内容につき1枚のカードに表記し、ラベル (切片) 作成をおこなう
Step 2 : グループ編成 (小項目)
内容的に類似しているラベルを収集する
Step 3 : 表札づくり
収集されたグループに名前 (表札) をつける
Step 4 : グループ編成 (大項目)
さらにグループを収集し、大きなカテゴリーをつくる
Step 5 : 図解化

5. 結 果

保護者アンケートで得られた自由記述をもとに内容分析した結果を、以下に記述する。

1) 子育て支援活動への参加を通した「子どもの体験」

“本活動への参加が我が子にとって、どのような体験として繋がっているのか”，保護者の所感について回答を求め、内容分析をおこなった。その結果、大きく5つのカテゴリーに内容がまとめられた (Ta-

Table. 4 子育て支援活動への参加を通した「子どもの体験」

大項目	小項目	内容
1 様々な情緒反応を引き出す体験	1) 楽しさ	・ 知っている音楽で手遊びができて楽しそうだった ・ 音楽に合わせて体を動かして楽しそうだった ・ 最近歌に興味を持ちだしたので、目の前で歌や踊りを見れて楽しそうだった
	2) 喜び	・ 色んな遊びがあって、とても喜んでいて ・ 歌をみんなで歌って、喜んでいて
	3) 嬉しさ	・ 一緒に過ごせて嬉しそうだった ・ 大好きなキャラクターが出てきて嬉しそうだった
2 触れ合い・交流体験	1) 同年齢(世代)の子どもとの関わり	・ 色んな子と接する機会が少ないので、たくさんの人に声をかけてもらえてよかった ・ 同じ年代の子と関わっていい刺激になったようだ
	2) 異年齢の子どもとの関わり	・ 普段、違う年齢の友達やお兄さん・お姉さんと触れ合う経験が無いので、いい経験になった ・ 普段、家で過ごすことが多いので、色んな年代のお友達と過ごせてよかった
	3) 保護者との関わり (スキンシップ)	・ ゆっくり子どもとスキンシップが取れる時間となった ・ 普段中々、じっくりと子どもと向き合えないので、スキンシップが取れてよかった
	4) 人以外との触れ合い	・ 音楽やリズム、歌に触れ合うことができてよかった ・ 色んな楽器の音に触れ合えてよかった
3 探求心・好奇心を刺激する体験	1) 興味・関心	・ 絵本の世界に気持ちが引きつけられて興味津々だった ・ 色んな音が出る楽器に関心を寄せ、興味津々だった
	2) 挑戦・意欲	・ 苦手だった跳び箱を楽しくチャレンジすることができていた ・ 出来ないことを、自分でやってみようという意欲に繋がった
	3) 創造性	・ 色々な材料を使って、想像力を膨らませながら製作する経験になった ・ 自由な発想を膨らませながら、ものづくりをすることができた
4 非日常的な体験	1) 普段できない経験	・ 普段家では出来ない経験 (新聞プールや大きな絵本) ができた ・ 家では経験できないダイナミックな遊びができた
	2) 初めての経験	・ 初めて人形劇を目の前で見て、貴重な経験となった ・ 楽器に初めて触らせてもらい、嬉しそうだった

ble. 4)。

まず一つ目は、『様々な情緒反応を引き出す体験』である。本活動では、子どもの様々な感覚を刺激するような遊びの場を提供している。保護者からは「(子どもが) 音楽に合わせて体を動かして楽しそうだった」「色んな遊びがあってとても喜んでいった」といった回答が得られており、色々な遊びや体験を通して“楽しさ、喜び、嬉しさ”といった、様々な情動を引き出す体験として繋がっていることが示された。

次に二つ目として、『触れ合い・交流体験』である。子育て支援活動への参加を通して、そこに集う同年齢・異年齢の子どもたちとの交流や保護者との触れ合い（スキンシップ）など、“子ども対人（人と人）”との交流体験に繋がったといった記述が多く得られていた。さらに、“対一人”のみならず、音楽や楽器、歌や人形劇など、人以外のものと触れ合える時間として繋がっていることも示された。

続いて、三つ目には『探求心・好奇心を刺激する体験』が挙げられ、「気持ち引きつけられて興味津々だった」「苦手なことや出来ないことへの意欲

に繋がった」さらには「自由な発想を膨らませながら遊べた」など、子どもの興味・関心や創造力、さらには苦手なことや上手く出来ないことに挑戦（チャレンジ）する意欲を引き出す体験として繋がっていたことが示された。

最後に、四つ目として『非日常的な体験』が挙げられた。ここでは、「普段、家ではできないダイナミックな遊びができた」や「初めて人形劇を目の前で見ることができ貴重な経験になった」など、普段の日常生活場面では、なかなか経験することが出来ない遊びや、生まれて初めて見たり触れたりするものとの出会いなど、本活動の場が、子どもたちにとって、非日常的な体験を味わえる一つの場として繋がっていることが示された。

2) 子育て支援活動への参加を通した「保護者の体験」

本活動への参加を通して、保護者らがどのような所感を抱き、且つどのような体験へと繋がっていたのか、アンケートの記述内容をもとに分析をおこなった。その結果、大きく3つのカテゴリーに内容がまとめられた（Table. 5）。

Table. 5 子育て支援活動への参加を通した「保護者の体験」

大項目	小項目	内容
1 子育て・子育てへの気づき・発見	1) 子どもの成長の発見	・ 子どもの新しい表情や動きに気づいた ・ 歌や絵本の時に集中して見ている姿に成長を感じ、驚いた ・ 楽しそうに踊っている姿をみて、音楽に合わせて動くのが好きということに気づいた
	2) 子どもとの関わり方の発見	・ どのようにしたら興味を持つのか、勉強になった ・ (学生さんの関わりを見て) 声かけや関わり工夫を発見することができた
2 関係性と遊びの広がり	1) 関係性の広がり	・ 普段、子どもと二人で過ごすことが多いので、たくさんのお友達と遊べてよかった ・ 親同士の繋がりが出来てよかった ・ 大学生のお兄さんお姉さんと交流する機会がないので、いい経験になった
	2) 遊びの幅の広がり	・ 室内遊びのヒントを学べた ・ 新しい手遊びや触れ合い遊びを覚えることができた ・ 絵本を読み聞かせるだけではなく、体験と結びつけるとより深められることを知った
	3) 家庭への広がり	・ 今日おこなった手遊びやダンスを家でもやってみようと思った ・ 家で遊ぶレパートリーが増えてよかった ・ たくさんの歌に触れられたので、家でも一緒に歌ってみたい
3 気分転換	1) 保護者自身のリフレッシュ	・ 普段、何かと家にこもり気味なので、リフレッシュができた ・ 普段と違う環境で自分もゆっくりとした気持ちで過ごすことができた ・ 色々な人が子どもを見てくれるので、安心して過ごせてリフレッシュができた
	2) 楽しい時間の共有	・ 子どもと楽しい時間を過ごせて笑顔が見れて嬉しかった ・ 子どもの笑顔が見れて嬉しく感じ楽しめた ・ 親子で一緒に触れ合えて楽しい時間を過ごせた

まず一つ目に『子育て・子育てへの気づき・発見』である。本カテゴリーでは、「歌や絵本の時に集中して見ている姿に成長を感じ驚いた」や「(学生さんの関わりを見て) 声かけや関わりの工夫を発見することができた」といった記述があり、子育て支援活動への参加を通して、子どもの成長やこれまで知らなかった新たな一面を発見したり、子育てをしていく上でのヒントや新たな視点を見つける機会へと繋がっていたことが示された。

次に二つ目に『関係性と遊びの広がり』が挙げられる。本カテゴリーの中には、「親同士の繋がりが出来てよかった」「普段、子どもと二人で過ごすことが多いので、たくさんのお友達と遊べてよかった」といった“関係性の広がり”に関する内容や、「新しい手遊びや触れ合い遊びを覚えることができた」といった“遊びの幅の広がり”，さらには「今日おこなった手遊びやダンスを家でもやってみようと思った」といった“家庭への広がり”に関する記述内容が含まれていた。

最後に三つ目として『気分転換』が挙げられる。ここでは、「普段、何かと家にこもり気味なので、リフレッシュができた」「自分もゆっくりとした気持ちで過ごすことができた」といった記述がみられ、

活動への参加を通して保護者自身も気分転換を図ることができていた様子が窺えた。さらに、「子どもの笑顔を見ることができて嬉しく感じ、私自身も楽しめた」「子どもと楽しい時間を過ごせた」といった記述内容も見受けられ、子どもとの楽しい時間を共有することで、保護者自身も気分転換に繋がっていたことが示された。

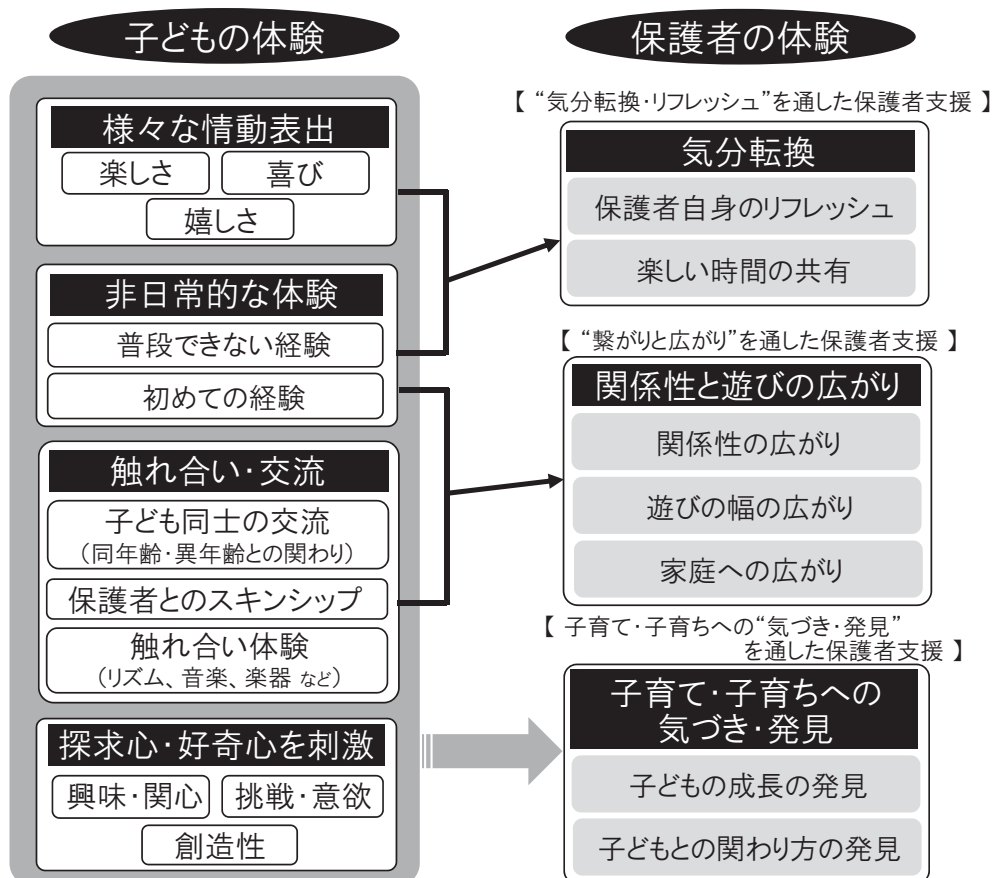
6. 考 察

今回得られた結果より、子育て支援活動への参加を通して、子どものみならず、保護者自身にとっても様々な体験へと繋がっていたことが明らかになり、参加者たちにとって有意義な活動となっていたことが窺えた。

ここからは、今回の内容分析を通して明らかになった様々な体験が、“保護者の何を支援しているのか”，保護者支援という視点から、考察していきたい (Figure. 4)。

1) “つながり・広がり”を通した保護者支援

今回実施したアンケートの記述より、子育て支援活動での経験を通して、〈関係性の広がり〉や〈遊



びの幅の広がり〉さらには、活動内での取り組みを自宅に持ち帰り、実際に試してみようとする〈家庭への広がり〉など、様々な側面への広がりをみせていたことが示唆された。

また、本稿においては、紙面の都合上、詳細については記載していないが、今回アンケートに協力していただいた保護者の過半数は、現在の自身の勤務形態について“働いていない”と回答しており〔参考データ：常勤26.4%，パート11.0%，働いていない54.9%，その他7.7%／N=91〕、且つアンケートに回答する際も「普段、家で子どもと二人で過ごすことが多いので～」「色んな人と接する機会が少ないので～」といった表現を用いて記述する内容が多く見受けられ、このような特徴を踏まえると、日々子育てに専念しながら、“子ども－保護者”間で過ごす時間が多い様相が窺えた。

門脇（2010）は「人間関係の中にいることが自分自身の喜びにつながり、自信や意欲や自尊心を高め、自分の存在価値を自覚する」と述べており、子育てを同時期にしている人との繋がりを支援することは親支援として有効であることを指摘している⁶⁾。さらに、森下（2006）も、子どもを持つ家庭は、子育ても家庭が中心となることから、親自身が不安や悩みを抱えたまま孤立しがちであることを指摘⁸⁾した上で、親としての成長や社会参加のきっかけとなる子育て支援を地域の中で、おこなっていくことの必要性について述べている。

育児による孤立化や地域社会とのつながりの希薄化、さらには待機児童問題といった、昨今の子育て（孤育て^{注2)}）を取り巻く環境が、大きな社会問題となっている実態を踏まえると、子育て世代が集うコミュニティを本活動を通して提供することは、「保護者同士の新たな関係構築」や「地域社会との接点を持つ一つのきっかけ」として繋がり、“保護者支援”という視点から見ても、大きな意味を成しているのではないかと考える。

また、先述したような保護者間（個人間）における〈関係性の広がり〉のみならず、〈遊びの幅〉といった、“個人内”のレパトリーの広がり、さらには、活動の場を超えた〈家庭への広がり〉も、保護者の体験として存在していることが明らかになった。

本活動では、学生が主体となって親子で楽しめる

プログラムや遊びを企画しており、ボランティア活動や現場実習を通して獲得した学びが、企画内のいたるところに散りばめられている。生活の中にある身近なもので玩具や楽器をつくったり、親子で楽しめる手遊びや踊りをしたりと、その内容は多岐に渡っており、「遊びのレパトリーが増えて良かった」「家でもやってみようと思う」といった参加者の声を踏まえると、子どものみならず一緒に参加した保護者らにとっても、ここでの経験はとても新鮮且つ刺激的であり、日々の子育てに活かせるヒントを獲得していた様子が窺えた。

“学生個々が獲得した様々な学びや経験・知識を互いに持ち寄り、その知恵を地域の子どもたちやその保護者に還元していく”，さらに，“そこに参加した保護者が日々の生活の中に取り入れ実践してみる”この流れこそが、子どもの子育てや子育て（保護者）支援に繋がっており、地域貢献としての一つの役割・機能を果たしているのではないかと考える。

2) 子育て・子育てへの“気づき・発見”を通した保護者支援

本活動で繰り広げられる、様々な遊びやプログラムへの参加を通して、子どもたちは、〈興味・関心〉を引きつけられたり、〈創造力〉を膨らませて遊んだり、健やかな成長を遂げていく上で大切な刺激を受けていた様子が窺えた。また、そのような子どもの様子を見た保護者自身も「子どもがどんなことに興味があるのか気づけた」「母親から離れてお兄さんお姉さんたちと遊ぶことが出来て驚いた」など、子どもの成長や新たな一面への気づきが生まれ、子どもに対する理解がより深まっていたことが示唆された。

さらに、「学生さんの関わり方を見て声掛けや関わりの工夫を知ることができた」「学生のみなさんが上手に子どもを引きつける関わりをしてあり参考になった」といった記述も多くみられ、本活動への参加を通して、子どもの成長への気づき（＝子育ての視点）のみならず、子どもを育てていく上での保護者自身の気づき（＝子育ての視点）といった、2側面の気づきを促す体験へと繋がっていたのではないかと考える。

先述したような保護者の声を踏まえると、これらの気づきを促す背景には、活動を共にした学生の存

²⁾ 核家族化や少子化が進む中で、コミュニティとの繋がりが周囲の助けや協力を得ることができずに、閉鎖的な環境の中で子育てをおこなう状態を表した言葉。

在が非常に大きかった様子が窺えた。

つまり、子どもたちが色々な遊びや活動に参加する中で、学生と子どもがどのように遊び関わっているのか、その姿を少し離れたところから保護者が観察し、普段の自身の関わりのあり方と照らし合わせてみる。このようなプロセスを通して、子どもとの関わる上でのヒントを獲得したり、新たな手立てを発見したりしていたのではないかと考える。

有川（2017）は、『「遊び方」を提供することは、保護者に「子どもとの関わり方」を提案していることとほぼ同じ意味を持っている』と指摘しており、「遊び方」を保護者に提供することで、親子が関わる機会が増えると述べている。

この指摘を踏まえると、日々の子育ての中で、学生が提供した遊びや子どもとの関わりの気づきが、生かされることは“保護者の子育てを支援する”という視点から見ても非常に有意義なものであり、本活動が保護者支援としての機能を果たしているのではないかと考える。

3) “気分転換・リフレッシュ”を通した保護者支援

子育て支援活動に実際に参加した保護者の声として、「ゆっくりとした気持ちで過ごすことができた」「学生の皆さんが子どもたちと関わってくれるので、安心して過ごせた」「普段家にこもり気味なので、リフレッシュできた」といった内容が多く見受けられた。このような声を踏まえると、保護者自身が気兼ねなく安心して子どもを連れてくることができるコミュニティ・居場所づくりこそが、子育て支援をおこなっていく上で、とても大切な視点であり、それを保護者自身が実感・体感できて初めて、親の“気分転換”や“リフレッシュ”として繋がるのではないかと考える。

本稿の冒頭でも述べた通り、本取り組みは、将来子どもと関わる専門職を目指す本学の学生らによって企画・運営された子育て支援活動であり、活動当日も学生らが主体となって子どもたちと関わっている。たくさんの人との関わりや学生らの見守りの目がある中での活動ということもあり、保護者自身も日々の育児から少し離れて、その時間をゆっくりと安心した気持ちで過ごすことができていたのではないだろうか。

さらに、保護者からは「子どもが楽しそうに過ごしている姿を見ることができて嬉しかった」「子どもの笑顔をたくさん見られて楽しめた」といった記

述もあり、楽しく笑顔で過ごしている我が子の様子を見ること自体が、保護者自身の喜びや癒しに繋がっていることも窺えた。

活動の中で子どもが見せる様々な表情や楽しそうに過ごす様子を見て、保護者自身も活動を楽しみ、気分転換やリフレッシュへと繋がっていく。日々の子育てをおこなう中での“止まり木”のような存在として本活動が機能し、保護者支援としての役割を果たしていれば幸いである。

7. おわりに

本稿では、子育て支援活動「子どもミュージアム」に参加している保護者たちが、活動への参加を通してどのような体験へと繋がっているのか、アンケートの記述内容をもとに“保護者支援”の視点から分析・検討をおこなった。

その結果、活動への参加を通して、保護者同士のネットワークの広がりや子どもを見る視点の幅の広がり、さらには保護者自身の心身のリフレッシュに繋がったりと、子どものみならず保護者にとっても、大変有意義なコミュニティとして本活動が機能していることが窺えた。また、参加者のみならず、本活動を企画・運営する学生らにとっても、講義や実習、ボランティア等で獲得した学びや経験を、地域の方々に活かし還元する場の一つとして機能していることも窺え、“地域住民－学生”双方にとって実りある経験・学びへと繋がっているのではないかと考える。

本学でのこの取り組みは、来年度丸10年という大きな節目を迎える。今後は、地域に根付き、より充実した子育て支援活動となるよう、参加する子ども・保護者が“この場に何を求めているのか”，そのニーズを丁寧に汲み取り、刻々と変化していく時代の流れに応じた活動を展開していく必要があるのではないかと考える。

参考文献

- 1) 西村侑香里・西村麻希・田中麻里、『地域子育て支援活動「子どもミュージアム」における取り組み－平成28年度の実践報告－』、西九州大学子ども学部紀要、第9号、135-142、2018
- 2) 西村麻希・西村侑香里・田中麻里、『地域における子育て支援活動を通した学生の学びに関す

る研究～学生の“実践的学び”からみる活動意義について～』，西九州大学子ども学部紀要，第9号，19-26，2018

- 3) 西村麻希・西村侑香里・田中麻里，『地域における子育て支援活動「子どもミュージアム」に参加した学生の意識の変化と成長について—学生アンケートの内容分析を通した“実践的学び”の検証—』，西九州大学子ども学部紀要，第8号，1-13，2017
- 4) 西村麻希・田中麻里・西村侑香里，『西九州大学子ども学部における子育て支援活動—「子どもミュージアム」平成26年度の活動報告—』，西九州大学子ども学部紀要，第7号，85-92，2016
- 5) 門脇厚司，『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』，岩波書店，2010
- 6) 虫明淑子・西山修・高橋敏之，『幼稚園教育における人的つながりを支える親支援の方向性』，岡山大学教師教育開発センター紀要，第5号，83-92，2015
- 7) 森下順子，『子育てによる母親の心理的行動的变化と子育て支援』，信愛紀要（53），11-17，2013
- 8) 文部科学省 家庭教育支援の推進に関する検討会，『つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～』，2012
- 9) 有川 一，『保護者に「遊び方」を提供することの効果』，中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究，第2巻，115-120，2017